

天台『六妙法門』の研究(三)

大野栄人

はじめに

本論文は、『六妙法門』の「第三隨便宜六妙門」を、天台止觀成立史の立場より究明するものである。そのために、原文を出し、国訳（書き下し文）をし、詳細な注を加え、現代語訳を付していくことにしたい。とくに、「注」において、天台止觀成立史の観点から、一々を詳細に論究していくことにしたい。

本研究は、平成十年度前期（四月～七月）の大学院修士課程の「講義」の授業の研究成果である。授業の受講者は、宗教学仏教学専攻の次の諸氏である。

伊藤光壽・橋本靖夫〔研究生〕、武藤明範・酒井琢生・

天台『六妙法門』の研究(三)（大野）

山川一成・泉田泰淳・出嶋和也〔修士一年〕、松尾文詞・佐藤宗弘・今井勝子・榎原奈央子・杉浦芳雄〔修士二年〕、鄭夙雯〔修士一年〕、當間日澄〔聴講生〕

毎週、右の担当の大学院生諸氏がやつたものを、伊藤光壽氏が文章化され、詳細な注を加えられ、ワープロに打って頂き、それに私が手を加えたものである。

本研究にもし用いるところがあれば、全面的にご尽力を頂いた伊藤光壽氏、実際に下調べをし、授業をすすめもらつた大学院受講生諸氏の功績である。

もし非があれば、その一切の責任は、授業を指導した私にあることをお断りしておきたい。

(原文)

十四六・五五〇b
次釋第三隨便宜六妙門。夫行者欲得深禪定智慧。乃至實相涅槃。初學安心。必須善巧。云何善巧。當於六妙門法。悉知悉覺。調伏其心。隨心所便。可以常用。所以者何。若心不便修治。卽無益。是故初坐時。當識調心。學數次當學隨。復當學心觀還等。各各經數日。學已復更從數隨。乃至還淨。安心修習。復各經數日。如是數反。行者卽應自知心所便宜。若心便數。當以數法安心。乃至淨亦如是。隨便而用不簡次第。如是安心時。若覺身安息調。心靜開明。始終安固。當專用此法。必有深利。若有妨生心散闇塞。當更隨便轉用餘門。安卽爲善。可以長軌。是則略明初學善巧安心六妙門。是知便宜用心大意。復次行者。心若安穩。必有所證。云何爲證。所謂得持身及龐住細住。欲界未到地初禪等種種諸禪定。得諸定已。若心住不進。當隨定深淺。修六妙門開發。云何名淺定不進修六門令進。如行者初得持身法。及龐細住法。經營於日月而不增進。爾時應當細心修數。數若不進。復當修隨。隨若不進。當細凝心修止。止若不進。當定中觀陰入界法。觀若不進。當還更反檢心源。還若不進。當寂然體

淨。用此六法。若偏於一法。增進之時。當卽善修之。卽漸進入深禪定。便過數境。數相既謝。進發隨禪。於此定中。若不境進。當善修隨止觀還淨等五法。定進漸深。隨境已度。若發止禪。禪若不進。當善修止及觀還淨等四法。止定進漸深。觀心開發。雖有止法。知從緣生無有自性。止相已謝。若觀禪不進。當更善巧修觀及還淨等三法。觀禪既進。進已若謝。轉入深定。惠解開發。唯覺自心所有法相。知觀虛誑不實亦在妄情。如夢中所見。知已不受。還反照心源。還禪經久。又不進。當復更善反觀心源。及體淨當寂。還禪既進。進已若謝。便發淨禪。此禪念相觀已除。言語法皆滅。十五五a無量衆罪除。清淨心常一。是名淨禪。淨若不進。當善却垢心。體真寂虛。心如虛空。無所依倚。爾時淨禪漸深寂。豁然明朗發真無漏。證三乘道。此則略說六妙門。隨便宜而用增長諸禪功德智慧。乃至入涅槃也。復次行者。於其中間。若有內外障起。欲除却者。亦當於六門中。隨取一法。一試用却之。若得差者卽爲藥也。治禪障及禪中魔事病患。功用六門悉得差也。上來所說。其意難見。行者若用此法門。當善思推取意。勿妄行也。

(国 訳) (書き下し文)

三 便宜に隨うの六妙門

次に第三の便宜に隨うの六妙門⁽¹⁾を釈せば、夫れ行者、深く禪定・智恵ないし実相・涅槃を得んと欲さば、初めに安心を学するに、必らずすべからく善巧⁽³⁾にすべし。

云何なるか善巧なるや。

まさに六妙門の法を悉く知り、悉く覚つて、その心を調伏すべし。心の便せらるるに隨い、もつて常に用うべし。⁽⁵⁾所以は何かん。

若し心、便ならざれば、修治するにすなわち益なし。

この故に初め坐する時、まさに調心を識るべし。数を学し、次にまさに隨を学すべし。またまさに心の觀・還等を学すべし。おのおの数日を経て学し已りて、また更に数・隨より、ないし還・淨なるまで安心を修習し、またおのおの数日を経て、かくの如く數反⁽⁹⁾せよ。行者、すなわちまさに自ら心の便宜せらるるを知るべし。もし心、數に便ならば⁽¹⁰⁾、まさに數法をもつて安心すべし。ないし淨

もまたかくの如く、便に隨つて用いて、次第を簡⁽¹²⁾ばず。かくの如く安心する時、もし身安く、息調い、心静かに開明して、始終安固なることを覺れば、まさに専らこの法を用うべし。必らず深き利あり。

もし妨げを生じ、心散じて閻塞なることあらば⁽¹⁴⁾、まさに更に便に隨つて転ずべし。余門を用いて安んじ、すなわち善となすをもつて、長く軌となすべし。これ則ち略して初學の善巧安心の六妙門を明かす。これ便宜の用心⁽¹⁶⁾を知る大意なり。

また次に、行者、心若し安穩なれば、必らず所証あり。云何なるか証なるや。

いわゆる持身、及び龜住・細住、欲界未到地・初禪等の種々の諸禪定を得。諸定を得已りて、もし心住して進まざれば、まさに定の深淺に隨つて、六妙門を修して開発すべし。

云何なるをか淺定進まざるに、六門を修して進めしめんと名づくるや。

行者、初め持身の法及び龜細住の法を得、日月を経て増進せざるが如し。その時、まさに細心に數を修して數

もし進まざれば、またまさに隨を修すべし。隨もし進まざれば、まさに細かに心を凝らして止を修すべし。止もし進まざれば、まさに定中に陰入界の法を觀ずべし。觀もし進まざれば、まさに還をもつて心源を反檢すべし。還もし進まざれば、まさに寂然として淨を体すべし。⁽²³⁾ こ⁽²⁴⁾ の六法を用うるに、もし一法に偏して増進する時は、まさにすなわち善くこれを修すべし。すでに漸く進んで深く禪定に入れば、便ち數境を過ぐ。數相すでに謝すれば、⁽²⁵⁾ 進みて隨禪を發こす。この定中において、もし境進まざれば、まさに善く隨・止・觀・還・淨等の五法を修すべし。定、進んで漸く深ければ、隨境すでに度す。若し止禪を發こして、禪もし進まざれば、まさに善く止及び觀・淨等の四法を修すべし。止定進んで漸く深ければ觀の心を開発す。止法ありといえども、縁に従つて生じて自性あることなし。止相已に謝す。もし觀禪進まざれば、まさに更に善巧に觀及び還・淨等の三法を修すべし。觀禪すでに進み、進み已りてもし謝すれば、轉た深の定に入り、惠解開発して、ただ自心の所有の法相を観るのみ。觀は虛証にして実ならず。また妄情あり。夢中の所見の

如しと知る。知り已つて受けず。還をもつて心源を反照すべし。還禪久しきを経て、また進まざれば、まさにまた更に善く心源を反觀し、及び淨の當寂なるを体すべし。還禪すでに進み進み已りて、もし謝すれば、便ち淨禪を發こす。この禪は念相觀すでに除きて、言語の法皆滅し、無量の衆罪除きて、清淨にして心常に一なり。これを淨禪と名づく。淨、若し進まざれば、まさに善く垢心を却くべし。真の寂虛を体すれば、心は虛空の如く、依倚する所なし。その時、淨禪漸く深寂に、豁然明朗にして、真の無漏を發こし、三乘の道を証す。これ則ち略して六妙門、便宜に隨つて用いて、諸禪の功徳智恵を增長し、ないし涅槃に入るこことを説くなり。

また次に、行者は、その中間において、若し内外の障起ることありて、除却せんと欲さば、またまさに六門の中において、隨つて一法を取りて一々に試みに用いてこれを却くべし。もし差ゆることを得れば、すなわち薬となすなり。禪の障及び禪中の魔事・病患を治するに、功をもて六門を用いて悉く差ゆることを得るなり。上來の所説、その意、見難し。行者、もしこの法門を用うる

に、まさに善く思推して意を取るべし。妄りに行ずること勿かれ。⁽⁵¹⁾

(注)

(1) 便宜に隨うの六妙門＝「便宜」は、自分の心の状態に応じて、それぞれの素質や能力という機根に応じての意である。「隨便宜六妙門」は、心の状態や機根に応じて、六妙門を修行していく方法の意味となる。

(2) 深＝「深禪定智慧、乃至実相涅槃」の「深」は四つに掛けて、「深禪定深智慧、乃至深實相深涅槃」と読み取る。

『六妙法門』は、天台智顕の初期の教説であり、三乘人に対して説かれたものである。従って、いついかなる時も程の意を秘めるこの「深」は智顕が説く教相判釈の、いわゆる「藏通別円」の通教・別教の段階の悟りのレベルをいうと取ることができる。別教の段階の等覚・妙覚は、円教の初行・二行に相当

し、別教の十地は、円教の十住に相当する。

なお、教相判釈は、教相とも、判教とも、教判とも、教授ともいう。教えが説かれた形式、方法、順序や説かれた意味内容などによつて、教説を分類して体系づけ、仏の真の意図を明らかにすることをいう。すなわち仏教の經典ははなはだ数が多く、その説き方や内容は一様ではない。これが仏陀の一生涯に説いた教えであるとすれば、それぞれに何らかの意図があり、何らかの順序次第がなければならぬことになる。だから諸經典を体系づけ価値づけて、仏の真実の意図を明らかにする必要からなされたのが、教相判釈である。

インドでは諸經論は、歴史的に発達したものである。しかし中国では、それらの成立順序とは関係なく、ほとんど同時的に翻訳され、研究されていった。従つて、それらの諸經論の多様な教説の中から、それぞれ自己の信奉する教えの教義的立場を明示する必要から、教説の体系化が必要となつたのである。種々様々な教判を伝えているが、とりわけ有名な

天台『六妙法門』の研究(二) (大野)

教判には、天台宗の「五時八教」、三論宗の「三藏三論」、法相宗の「三教八宗」、華嚴宗の「五教十宗」などがある。

天台智顗の「五時八教」は、仏陀の説法の順序から、華厳・鹿苑・方等・般若・法華涅槃の五時に分け、この五時に乳味・酪味・生蘇味・熟蘇味・醍醐味の五味を充當し、衆生を教え導く形式方法から、頓・漸・秘密・不定の四種類の化儀の四教に分け、また衆生の機根の応じて教え導いた教理内容から、藏・通・別・円の四種類の化法の四教に分けた。これらを総称して五時八教という。

化法の四教の藏教・通教・別教・円教を、「藏通別円」と略称する。「藏通別円」は、比叡山では、「ぞうつうべってん」と読み、南都では、「ぞうつうべちえん」と読まれる。

「藏教」は、經・律・論の三藏教の意であり、四阿含經を含む小乗教をいう。空の真義を把握していない、仏教教理の初步的段階のものとされる。

「通教」は、声聞・緣覚・菩薩の三乗に共通し、小

乗から大乗の初門に通じる教えをいう。

「別教」は、二乗と共通せず、ただ菩薩のためのみの教えの意である「不共」と、すべてのものを差別の面よりながめる「歴別」の教えをいう。

「円教」の円は、片寄らずすべてのものが互いにとけあつて完備しているの意である。すなわち迷いも悟りも本質的には区別がないというのが眞の道理であつて、それが仏の悟りであるから、円教は、仏の悟りのままを説いた教えをいう。

(3) 善巧^ハ善巧方便の意である。善巧方便は、仏が法を説く時、善く巧みに衆生の機根に叶つた、種々の方法や手段を用いることをいう。

(4) 悉く知り、悉く覺つて^ハ「知」は智慧に相当し、「覺」は禪定に相当する。一切を知り、一切を覚るの意となる。

(5) 調伏^ハ心の働きを、絶対的に克服するの意である。

(6) 心の便せらるるに隨い、もつて常に用うべし^ハ「便」の語源は、ものごとを治めることにある。人

のものごとをする召使の意味から、都合がよいが原意となる。

「心の便せらるるに隨い」は、心に都合よく、程よく合うことの意であるから、心を巧みに働かせることをいう。「もつて常に用うべし」は、六妙門の修行法を常に用い働くことをいう。

「心の便せらるるに隨い、もつて常に用うべし」は、心の働きや、素質能力の機根など、その場に応じて数息・隨息・止・觀・還・淨の修行法のいずれかをフル回転させて使っていくの意となる。

なお、「所」は、漢文の訓読では、受け身「～れる」、「～られる」の意を表わす。

「便」には、三義がある。一には方便の意であり、二には利がある、都合がよいの意であり、三には便宜の意である。便宜は、心の働きに応じたり、素質や能力という人の機根に応じたりの、適宜にの意である。

(7) 数を学し、次にまさに隨を学すべし。またまさに心の觀・還等を学すべし＝「数」は、六妙門の中

の一から十まで呼吸を数え乱れた心を調える数息門をいい、「隨」は、呼吸に従つて自我的な心を静める隨息門をいい、「觀・還」は、それぞれ対象を客観化し内にある心を觀察する觀門と、自分の心に執着せず心を解放する還門の修行法をいう。

「またまさに心の觀・還等を学すべし」の一句には、六妙門の心の働きを停止して心を一つの対象へ集中する止門と、心そのものにも一切こだわりをもたない淨門が言及されていない。「等」の内意として、止門と淨門を補うと一句の意が判然とする。

なお、「學」は、いわゆる学問をいうのではなく、修習すなわち修行実践をいう。

(8) また更に数・隨より、ないし還・淨なるまで安心を修習し、またおのれの数日を経て＝「従～乃至～」は、～より乃至～なるまでと訓む。AからBに到るまでの意で、AとBとの中間を省略した言い方である。

従つてこの一句も、六妙門の中の心の働きを停止して心を一つの対象へ集中する止門と、対象を客観

化し内にある心を観察する観門を補つて意を取るとよい。

「安心」は、心を一点に止めて安住させた不動な境地をいい、「修習」は、身に付くまで修行実践することをいう。従つて、「安心を修習」するということは、心を一点に止めて修行し、その修行を継続するの意となる。

『方等二昧行法』や『法華三昧懺儀』では、懺悔法として三七日を一期として懺悔すれば罪は消滅すると説く。三七日は二十一日の意であり、懺悔には一単位としての七日を、三回繰り返す懺悔の修行期間の必要を明示している。

「またおのの数日を経て」の「数日」は、このようないくつかの修行期間が背景にあっての一句かと推察される。罪を犯し続けるのが人の生き方であり、罪は人の心を閉塞する。人は仏となる存在であり、罪の欠片も許されない存在である。仏陀の教えは、人の心を開くものであるから、懺悔によつて自らが自らの内に救いの道を求めていくのである。智顕は、懺悔を重

視している。「数日」には、これらの背景が推察できる。

(9) 数反 || 「反」は、うたびの意である。従つて「数反」は、毎日繰り返しての意となる。

(10) もし心、数に便ならば || 「便」は都合がよい、利があるなどの意である。従つて、心を集中して不動の境地に至るため、もし心が、一から十まで呼吸を数え乱れた心を調える六妙門の中の数息門という修行法を修行して利があるならばの意となる。

(11) 安心 || 仏法によつて心の安らぎを得て、心を不動の境地に安住させること、及びそれによつて到達した境地をいう。

(12) 便に随つて用いて、次第を簡ばず || 「便に随つて」の便は、便宜の便である。次第は順序の意である。従つて、「便に随つて用いて、次第を簡ばず」は、自分の心の状態やそれぞれの素質や能力という機根に応じた、その場その場の心の巧みな働きに従つて、六妙門を適宜に用いるのである。始めから、六妙門が修行の順序であるとして、先ず数息門を修

行し、数息門は実践し終えたので、つぎは隨息門の実践というように、続けて止・觀・還・淨の順序に、六妙門を実践するのではないという意になる。

(13) もし身安く、息調い、心静かに開明して、始終安固なることを覚れば、身を安らかにし、呼吸をととのえ、心を静かにする、いわゆる「調身・調息・調心」の三つは、禪定に入る絶対必須の要件である。また分別を超えて、存在するものすべてが真実のすがたであるという、諸法は実相なりと照らしめる智慧は、心を巧みに法性の真理に落ち着かせる禪定を通して得られるものである。

だから身が安らかになり、呼吸が微細になり、心が安定して入った禪定によって、心が不動となつて「開明」、すなわち自我の一つひとつ束縛から解き放たれ、智慧の眼が開かれていくのである。

智顕は、自我と対面し、自我を抜け出す戦いを説いている。自我は対治しても対治しても、果てしなく生起して止まないのである。自我に振り回されれば、生きながら地獄に墮ちる。生きながら地獄に

墮ちないために、自我と対面し対治することを説く。自我を抜け出す努力の積み上げこそが大切であり、その努力の中で、違う角度からものを見、生活できる方向転換が大切だと説くのである。

これが「開明」、すなわち自我の一つひとつから解き放たれ、智慧の眼が開かれていく様相である。しかしこの一句は、更に「始終安固なることを覚れば」とある。一切が安穩堅固であると自覺すればといふ意の裏には、十信・十住・十行・十回向・十地・等覚・妙覚の五十二位が示すように、悟りの浅深が存在する。だから、段階的な悟りを得たら、六妙門を繰り返し修行実践しなさいと説き続けるのである。

(14) もし妨げを生じ、心散じて闇塞なることあらば、「妨」は妨障、すなわち修行の妨げとなる煩惱をいう。「散」は散心、すなわち一点に集中しない、心の散乱をいう。「闇塞」は、心の対象が私を捉え、私を支配して止まることをいう。

従つて、もし仏道修行の妨げとなる種々の煩惱が生起し、それに捉われて心が一点に集中せず、心の

天台『六妙法門』の研究(三) (大野)

対象の誘惑に捉われ支配され、煩惱の迷路に墮ちてしまつた時には、が一句の意となる。

なお、坐禅には、心の中に入つてきた対象を追いかけず追い払わず、心意識の運転を止めることを目的とするものがあるが、智顕が説く坐禅は、このように対象を断絶する坐禅ではない。智顕が説く坐禅は、対象を支配し、対象をコントロールする坐禅である。心意識の運転は止めず働くせ、心によつて対象を封じ込め、心を一点に集中する坐禅である。

人は、対象から誘惑を受け、思うがままに対象に支配され、対象に振り回されてしまうものである。対象が私を支配することが、「闇塞」の心である。

私は身・口・意の行いをつくり続けて止まない存在である。この三業がもたらす潜在的な業力、すなわちカルマが闇塞の心に動き出す。動き出したこのカルマに挑み、カルマと戦うことを智顕は説く。人は、カルマを対治しきらなければ、決して悟りに至ることはできない。生ある限り、己のカルマから離れられないのが人の存在であるから、私が私と対話

し、私が私を問い合わせ、私が私の存在を問い合わせる戦いが、まさに智顕が説く坐禅である。坐禅の中で泥沼に浸かり、内なる悪と戦い続け、私が対象を支配し、コントロールしようとするのが、智顕が説く坐禅であるといえる。だから坐禅は安樂の法門ではなく、地獄の法門だというのである。

(15) 余門を用いて安んじ、すなわち善となすをもつて、長く軌となすべし॥「余門」は、例えればいま数息門を修行しているとすれば、数息門以外の隨息・止・観・還・淨の六妙門をいう。

「善となす」は、善心を起こすことをいう。仏教は善心を起こすことを目標とする當みに他ならないが、紙一重で恶心を起こさせることにもなる。自我をよしとする世の中の有り様や、あれかこれかを天秤に掛けて駆け引きをして止まない風潮を、人を害する毒であると見極め排除し、人の善心である十善業道を起こしていくところに仏教の意義がある。このことを「長く軌とすべし」といつている。

(16) 用心॥修行するための手段や方法の意である。

(17) 持身、及び龜住・細住、欲界未到地・初禪等の種々の諸禪定を得。〔持身〕は持身の法、「龜住・細住」は龜住・細住の法と、法を補つて読むと解り易い。「持」は、保つこと、拠り所とすること、しっかりと学び保つことの意である。犯した罪に応じて罰する犯戒と違つて、持戒は、本来仏である人には、罪を犯すことは想定されない。私の中の仏様に相応しい生き方をさせていただくことが、人が生きる生き方でなければならぬ。だから戒は、本来仏である人が保ち続けるものであるという意が、持戒の

〔持〕に込められている。持身の「持」の意も、持戒の持と同じ意である。「身」は、因と縁が和合して今ここに存在する身体である。だから私の中の仏様に相応しい生き方をさせていただこうと、仏道修行の中に身を置き続けることが「持身」の意となる。

仏道修行の中に身を置き、保持し続けることが持身の法である。

「龜住・細住」は、三界の中の欲界に燃え盛る、粗い煩惱と細かい煩惱をいう。欲界の煩惱を観察し、

悩みの原因となる煩惱を、粗い煩惱と細かい煩惱に識別し、修行の対象にしていくという、煩惱を観ることが龜細住の法である。なお、「住」は、とどまることが原意であるが、執着していること、拘つていることの意から、煩惱をいうと考えられる。

迷いの生存を現出する相状について、「三細六龜」の九相を説く。

「細」とは、まだ心王と、心所という個々の心的作用の区別がなく、はたらく相が微細ではつきりしないことをいう。

「龜」とは、心王と心所とが相応し、結び付いてはたらく相が、粗くて、はつきりと、顯わであることをいう。

「三細」とは、(1)真如の法が、本来平等一味・無差別であると覚知できない妄想心が起こることを業といふ。真如に対する不覚によつて妄想心が引き起こされる時は、それが根本原因となつて、苦の生存が引き起こされる。根本無明が、実際の起動の第一歩であるとするのが「無明業相」。(2)無明業相によつ

て妄想心が起る時にはたらく対象を認識する心が「能見相」。(3)能見相の心所が認知する迷いの認識対象が「境界相」の三である。

従つて三細は、主觀客觀の分化以前と、分化した主觀と客觀が微細で、はつきりしない三相をいうと取ることができる。

「六龜」とは、(1)迷いの認識対象を対象として、心王と心所がはたらいて、第一に愛すべきものと厭うべきものとを分ける分別智のはたらきである「智相」。(2)一度生起した妄念が、次から次へと新たな妄念を起こして断絶することのない「相続相」。(3)苦樂を区別することによって、堅い執着を起こす「執取相」。(4)執着する対象に仮の名称を与えて、心の外に実在しているように思い誤り、ますますはからいの念を増大する「計名字相」。(5)智相・相続相及び執取相・計名字相という迷いによって、種々の善惡の行為、すなわち業をつくる「起業相」。(6)業によつて苦果を受け、苦の生存の中で心本来の自由な在り方が束縛される「業繫苦相」の六をいう。

従つて六龜は、智の分別・妄念の相続・妄念への執着・執着する対象への記名とはからい・善惡の行為・苦果による繫縛という、心王と心所が相應し、結び付いた粗くて、はつきりした六相をいうと取ることができる。

このように、細から龜へ、すなわち真と妄が和合して、本来清らかな不相應心である阿黎耶識の位から、心王と心所が結び付いた相應心である、六識の位へと進むことによつて、迷いの世界は現出するのである。悟りに至るには、龜から細へと向かわなければならない。

従つて、凡夫の境界は龜中の龜、つまり業繫苦相・起業相・計名字相・執取相にあたり、菩薩の境界は龜中の細、つまり相続相・智相、及び細中の龜、つまり境界相・能見相にあたり、仏の境界は細中の細、つまり無明業相にあたるとされる。

心王と心所が結び付いてはたらくことを「相應」というのは『大乗起信論』であるが、大乗佛教的一般的な「相應」は、『大品般若經』が相應品で説く

相応である。

人は、一切の存在を概念化し、抽象化し、文字や言葉で、概念化した内容を概念として理解し、伝えるものである。概念化し、概念を概念として伝えるところには、「真実直参」はない。真実そのものに直接参じおもむくのが、仏道であるとするならば、この概念規定は否定せざるを得ない。真実そのものに直参するには、徹底した自我的自己否定が必要となる。

『大品般若經』の「空」「無」「非有」などは、自我否定・概念否定による以外、菩薩・摩訶薩に至る道はないことを説く。『大品般若經』は、『大乗起信論』が説く、結び付く「相応」を否定し、直参することの「相応」を説くのは、自分づくりのルートをつくり直すためである。多くを知ることに利点はないし、概念づくりに利点はない。一切を概念を通さないというルートづくりをし、概念を通さないルートをつくり直すことが必要とされる。そこに、自我否定の「真実直参」の「相応」が存立する。

「欲界未到地初禪等」は、欲界において粗い煩惱や細かい煩惱を觀察し、煩惱が燃え盛る欲界から微妙な物質でできている色界に到るために、未到地と呼ばれる準備的な修行を重ね、初禪・第二禪・第三禪・第四禪の四禪など、様々な坐禪をする意となる。なお「等」は、四無量心・四無色定・四空定の修行法を内意する。

仏道修行の最難関は、この欲界から色界に到ることにある。何度も往き来を繰り返して、色界という絶妙な物質でできた、欲を離れた清らかな世界に到るのである。

(18) 開発 II つぎの一義がある。

(I) 大乗仏教は、人は本来菩薩・仏であるとする。

佛である自分が、釈尊が言う「自灯明」の「自」である。人が菩薩・摩訶薩としての修行法を切り開き、それぞれの人生を切り開いていくのが、大乗に生きる誓願といえる。人に具わる仏の本性を切り開いていくことが、「開発」の第一義である。

(2)修行の力によつて、善心を切り拓くことが「開発」の第二義である。

ここでは、(1)の義と取る。

(19) 細かに心を凝らして、心は、その対象であるものに流されて散り乱れるのが常であるが、その散乱した心を一点に集中することの意である。

(20) 定中に陰入界の法を観ず、一切のものを三種類に分けたものが「三科」である。三科は、五蘊（五陰）・十二入（十二入）・十八界をいう。略して蘊処界といい、これが蘊処界三科である。蘊処界は、旧訳では陰入界または陰界入という。

「五陰」は、我々の存在の構成要素である、物質と精神を五種類に分類した、色（物質性）・受（感覚）・想（表象）・行（意志的形成力）・識（認識作用）である。

「十二入」は、眼・耳・鼻・舌・身・意という六種類の主観的感覺器官である六根と、六根のそれぞれに対する色・声・香・味・触・法という、六種類の客観的対象である六境の十二をいう。

「十八界」は、十二入に、六根・六境を条件として生じた、眼・耳・鼻・舌・身・意という、六種類の認識作用である六識を加えた十八をいう。

五陰・十二入・十八界の「陰入界」は、一切のものをいうが、凡夫の身体を指すことがある。この一句では潜在的な我々の心の働きや、今、現に煩惱をつくり続けている我々の心の働きをいうと取る。

従つて、この一句は、本来は無実体である陰入界、すなわち心の働きを眼前に据えて、面と向かう対象である「現前の対境」として觀察することをいう。『大品般若經』は、「心不可得」を説く。本来心には、これが心であると、認めることができるものはない。心には実体がない。人は、実体がない心をつくり続け、実体がない心に拘り続け、それに悩まされ続けるものである。実体がない心が日夜つくり続けて止むことがない、ドロドロした業・カルマに塗れているのが、人間存在の本当の姿であるということができる。

智顕は、『摩訶止觀』において、心は本来無実体で

はあるが、無実体が無実体のままであるならば、そこには人間存在にとつて意味が生じない。意味がないところには、煩惱に塗れた人間を、人間として肯定的に受けとめる余地がないと説くのである。

人間存在を肯定的に受けとめるために、本来心は無実体であるが、日常起くる一刹那の心を「介爾陰妄の一念」として、その存在を認めるのである。そして「介爾陰妄の一念」を、止と觀の修行法によつて対治しなければならない対象であると説くのである。

智顕は、一心や一念は現にここにあるという立場に立つてゐる。そして「一念」という一瞬の心の中に「三千」の差別相があり、この「一念三千」には悩まされ続けているというのである。この一念三千を眼前に据えて直面し、それを乗り越えて、断滅するだけの本質を人は秘めていると、人間を肯定的に説くのである。

智顕は、人の存在を肯定的に説く。だから、煩惱をつくらないようにし、自分によりよい環境をつく

るために、『天台小止觀』『摩訶止觀』では、二十五方便に具体化されて説かれることになる。

(21) 心源＝心のみなもと、心の奥底の意である。

(22) 反検＝立ち戻つて、その善し悪しを考えるの意である。

(23) まさに寂然として淨を体すべし＝「寂然」は、諸法の即空に達し、法執を離れて、陰入界などのために動搖することがない心の境地をいう。「淨」は、六妙門の第六の淨門をいう。淨門は心そのものにも、一切こだわりをもたない修行法をいう。「体」は、諸法実相そのものを究め尽くして深く通達する体達の意ではなく、身をもつて理解する体解・体得ほどの意と取る。

従つて、この一句は、心そのものにも、一切こだわりをもたない淨門そのものの生き方をし、淨門の修行法を実践して、陰入界などによつて動搖するとのない不動の心の境地を、身をもつて理解するの意となる。

(24) 六法＝數息門・隨息門・止門・觀門・還門・淨門

の六種類の修行法をいう。

元来、修行法は、例えれば数息門から隨息門へ、隨息門から止門へと、順に実践を重ねるものである。

しかし、人の心はコロコロと自在に動いて止まないものである。だから、心の状態に応じて巧みに修行法を替えて、起こった煩惱を対治することが修行の基盤となる。この修行の基盤は、智顕の創出したものではない。これが、インド以来教示され、実践され、保持され続けてきた正統な修行法である。中国に伝わり、脈絡が欠けた修行の本来の在り方を明らかにし、正統な修行法として整理し、順序立てたのが智顕である。

(25) 一法=六妙門の中のどれか一つの修行法をいう。
(26) 便ち数境を過ぐ=「数境」は、数息門の修行法で到達する段階的な悟りの境地をいう。「過ぐ」は、過ぎてしまふの原意から、目的を達成するの意と取る。

従つて、一句の意は、数息門の修行法で到達しうとしている段階的な悟りの境地に至り着いている

となる。

(27) 数相すでに謝すれば=「数相」は、数息門の修行法で到達する段階的な悟りの境地をいう。「謝

は、「過ぐ」と同義で、目的を達成するの意である。

従つて、一句の意は、数息門の修行法で到達しようとしている段階的な悟りの境地が達成できればとなる。

(28) 隨境すでに度す=「隨境」は、隨息門の修行法で到達する段階的な悟りの境地をいう。「度」は、「渡す」の意である。度脱と熟す。無常の苦の此岸から、常住であり、安樂である彼岸へ渡すことの意である。迷いの此岸から、悟りの彼岸に渡し救うことが「度」であるから、この一句「度」も、隨息門の修行法で到達する段階的な悟りの境地に至るの意と取る。

(29) 止定=六妙法門の第三、心を動かさず思慮を止める、止門の禪定の意である。

(30) 観の心=六妙法門の第四、止門の禪定によつて一層湧き出る内なる我心、すなわち自分の心を自分

で観察する、観門の心の意である。

(31) 開発＝『六妙法門』は、煩惱としての自我を、何処か他にある方法手段を用いて断滅する教えを説くものではない。本来人は、煩惱としての自我と直面し、それをコントロールする力を潜在的に秘めている存在である。人の潜在的な自浄能力を分析したのが、数息・隨息・止・觀・還・淨の六つの法門である。

本来、人が共通してもつてゐる、この自浄能力を一つずつ切り拓き、掘り出していくことが開発の意である。

つまり、意識下に隠れる自我を意識で観て直面し、無意識下に隠れる潜在的な無我の自浄能力を引き出し、意識を対治するのが開発である。

智顕は、後の『摩訶止觀』において、一心あるいは一念を説く。一念はひとおもいの心である。極めて短い一瞬の中に起る心の働きが一念である。我々凡夫が、日常の一瞬一瞬に起こしてゐる微かな心の

中に、三千の数で現わされた宇宙の一切の姿が完全に具わつてゐることを「一念三千」で示す。「夫れ

一心に十法界を具し、一法界にまた十法界を具す、百法界なり。一界に三十種の世界を具し、百法界はすなわち三千種の世間を具す。此の三千は一念の心に在り。若し心無くんば已みなん、介爾も心ならばすなわち三千を具す」(『大正藏』四六・五四a)と『摩訶止觀』卷第五上に説く。

我々が今ここに持ち合わせている心に、三千の数で表現される現象の諸相がそのまま具わつていることをいう。地獄の心も、餓鬼や畜生の心もある中に、菩薩や仏の心も兼ね具えている有り様が、人の心である。日常起きて止まないどろどろとした煩惱に塗れた心を引き出し、その心の奥底を把握すること、すなわち徹底して観て考へることによつて、どろどろとした煩惱を対治し、人が本来具えている清らかな「自性清淨心」を引き出し、拓き出し、掘り起こして、本来の自己、本来悟つた仏としての自己に還ることを説く。

一念の中に三千の数で表現される、我々の心を窮めていくために、無限の修行が不可欠とされるのは

勿論である。

このように、私の側から観て考え、把捉するという修行を実践して、どろどろとした煩惱を観て考え、断滅し、対治していくのが、智顕の説く「開発」の意味である。そうすれば、衆生の感と仏の応が道交して、仏心に悟入させてもらえるのである。

一心・一念による把捉、すなわち意識によつて心をコントロールする修行法は、インドから伝えられた正統の修行法である。智顕は、人間である限り止められない、一人ひとりの介爾陰妄の心の働きを利用して、この心を働かせて人は生きるのだと説き、煩惱の奴隸に成り下がつた心に使役される生き方をしてはならないと説くのである。

ここで改めて、『六妙法門』の講説の意義を考えてみることにしたい。人は、この世に生を受けた瞬間から呼吸を始め、一瞬も途切れることがない。呼吸は、無意識の働きである。この無意識の呼吸に心を連動させ、呼吸を意識にコントロールさせようとするとのが「数息門」である。例えば、一日を五呼吸で

生きる修行者にとつては、一瞬でも呼吸以外のことには向かなければ、その瞬間に呼吸と途絶し生命を失うことになる。呼吸を、意識を超えた無意識のコントロールの下に置いて、呼吸のままに心を静めるのが「隨息門」である。その中で、心を動かさず、思慮を止める精神集中が「止門」である。心の働きを止めようとすればするほど、心の働きが現われ出るものである。心の働きを止めようとするから、心の働きが出てくる皮肉な有り様が人の心である。まさに「止即観、観即止」である。止なくして観なく、観なくして止なしである。だから、止によつて浮かび出てくる潜在的なカルマ・業を観ることができることになる。これが我心、すなわち自我を対治する「觀門」である。自我を明らかに觀察し対治するのが觀門であるが、自我を明らかに觀照しても、觀ずる自己の心に執着せず、心を固定して把握することがない、人間の本来のすがたに還すのが「還門」である。このようにして、心に拘りがなく、ありのままのすがたにある、本来の仏としての私の生き方が、

清淨無相の「淨門」である。

人に本来具わっている数息・隨息・止・觀・還・

淨の六つの能力を活用し、人としての正しい生き方のルート作りをし、十惡業を十善業に換えていく必要を説くのが、『六妙法門』である。本来具えていた人の潜在的能力を活用して、人としての正しい生き方を再構築せよと説くこの教えは、今の世を支配する価値観を引つ繰り返した、正にその対極にある仏陀の価値観に生きよと説く教えといえる。

(32) 縁に従つて生じて自性あることなし＝結果を生じさせる内的な直接の原因が「因」であり、外からこれを助ける間接の原因が「縁」である。また因を広義に解して、因と縁とを合わせて因ともいい、縁ともいう。一句の「縁」は、この広義の義である。

一切の存在はすべて因縁によつて生じ、因縁によつて滅する。因縁によつて生じることを因縁生、縁生、縁成、縁起などという。このように因縁によつて生滅している道理を因縁生滅の理といい、因縁によつて生滅する一切の法は、元來、実体があつたのでは

なく、そのまま空なる存在であるという道理が因縁即空の理である。

この因縁生・因縁所生法は、仏教の基本的な教説であり、仏教では縁起している事実のほかに固定的実体は認めない。全てのものが相関の関係にあり、互いに引き合い押し合いすることによつて成立しているのが、「縁に従りて生じ」の意となる。

「自性」は、それ自体に固有の固定的な性質であり、自分を自分ならしてめでいることをいう。一句では、我心・自我ほどの意と取る。

従つて、一切の存在は因縁によつて生じ、因縁によつて滅するのが真理であるよう、心の働きは対象を実在的に把握することによつて生じるのであつて、心の働きに固有の不変の実体があるのでないと知ればの意となる。

(33) 転た深の定に入り＝「転」は、うたたと訓じ、いよいよ、だんだんとの意である。「深定」は、深禅定と同義。深い境地の心の統一をいう。

従つて、一句は、いよいよ深い禪定に入るの意と

なる。

(34) 惠解開発して、ただ自心の所有の法相を覚る||

「惠解」は、無分別智としての智慧による解脱、すなわち慧解脱をいう。自我に塗れた心を、智慧によつて、本来の仏としての人間に移すことをいう。

智慧は、私が働くものではない。私の中の仏が働くかすものである。私の中の仏が働くようになるためには、修行が不可欠である。修行の結果、開発されるのが智慧である。元来、觀世音は眼と耳、文殊は頭というように、仏や菩薩は身体の機能から生まれたものである。仏・菩薩は、身体の外にあるのではなく、身体の内にあるものであり、私は仏の存在である。だから仏に相應しい生き方をせよと智顕は説くのである。

「開発」は、心の内にあるものを引き出し、掘り出

し、活用することをいう。「自心」は、本来の自己

の心の意であり、自性清浄心をいう。「所有」は、あらゆる、全ての意。「法相」は、一切のものが差別のすがたのまま存在するありのままのすがたをいう。

一句では、自己の中の智慧によつて自我が打ち消された、自己の心の本来清浄なすがたをいう。

従つて、一句は、真実の智慧に照らされた悟りを引き出し、自己の心のありのままの清浄なすがたを悟るの意となる。すなわち、真実の智慧に基づいた生き方をすれば、すべての人に素晴らしい世界が開けてくることを、仏は説き教えていると智顕は説くのである。

(35) 觀は虚誑にして実ならず||「觀」は、觀門の修行法によつて、觀門の境地に達成して深い禪定に入り、真実の智慧の悟りを引き出し、自分の心の清浄なすがたを悟ることをいう。つまりこの悟りも、觀門の段階にある修行で到達した觀門の悟りをいい、究極の悟りをいうのではない。「虛誑」の二語は、ほぼ同義。偽りをいう。「実ならず」は、真実ではないことをいう。

従つて、一句は、自性清浄を悟るこの悟りは、あくまでも觀門の段階の悟りであつて、究極の真理からすれば、嘘偽りであり、真実ではないの意となる。

(36) 妄情॥「妄情」は、妄念・妄想と同義であり、いわゆる分別をいう。妄想分別と熟す。凡夫が六境に貪著し、心の捉われによつてものの正しい姿を見分けることができず、誤つて妄りにはからうことである。

結局は、一切法の真実を知らない凡夫の迷心、すなわち無明をいう。

(37) 夢中の所見॥語義からは、夢の中で見られるもの意である。夢で見た対象は、實際には存在しないから、対象が実在しないことをいう比喩の表現である。なお、「見」は、凡夫の虚妄分別で思いなすことの意である。

(38) 還をもつて心源を反照すべし॥「還」は、還門の修行法を用いての意である。「心源」は、心のみなもの、すなわち仏である本来の自己の心をいう。「反照」の「反」は、修行者の意志を徹底することによつて、修行者の側から誘い出し、引き出していくの意を秘める。仏の側から働きかけられるのを待つの意ではない。従つて「反照」は、仏である自分

の心である心源を、照らし出すの意となる。「反觀」も同断。仏である自分の心の本源を徹底して観ることの意である。

(39) 浄の当寂なるを体すべし॥「浄の当寂」は、浄門そのものが寂靜、すなわち仏としての本来の自己に還ることをいう。「浄當寂」の「當」はそのもの意であるから、「淨即寂」と考えると分かり易い。「寂」は寂靜の意、ニルヴァーナの意であるが、仏としての本来の自己に還ることをいう。「体」は、身体に染み込ませる体得の意である。

従つて、一句は、浄門そのものが寂靜、すなわち仏としての本来の自己に還ることを体得しなければならないの意となる。

(40) 還禪すでに進み॥「還禪」は、六妙法門の第五、自分の心に執着せず、心を解放し、仏としての本来の自己に還る還門の禪定、すなわち還門の精神統一のことである。「進」は、段階的に禪定が増進することの意である。

従つて、一句は、還門の禪定がもう既に増進しの

意となる。

(41) 念相観すでに除きて、言語の法皆滅し、無量の衆罪除きて＝「念相観」は、心を働かせて理解しようとする觀法をいう。仏教は、心の働きである念相、すなわち心行を否定し超える「心行処滅」を目指す立場にある。

「言語の法皆滅し」は、言語を超えた悟りの境地にあることをいう。仏教は、文字や文章では表し得ない、思慮を超えた「言語道断」の境地を目指す立場にある。

「言語道断心行処滅」は、『大智度論』卷第二(『大正藏』二五・七一c)、『華嚴經』卷第五(『大正藏』九・四二四c)、『摩訶止觀』卷第五下(『大正藏』四六・五九b)などに説かれている。

「言語」は言い表わされたことばであり、「心行」は心の働きをいう。言語にしても、心行にしても日常の生き方であり、日常の方便である。「道」は口でいうことであり、「処」は心作用が起こるための場、すなわち色・声・香・味・触・法の六境と眼・

耳・鼻・舌・身・意の六根が合する十二の場をいう。

従つて、言語を絶し、思慮を超えていることを表わす「言語道断心行処滅」は、仏道修行によつて至り着く悟りの境地を表わしている。

何れにしても仏教は、言語の法と心行、すなわち念相の法とを、共に否定する立場にあり、それを超えたところに成立する立場にある。

「衆罪」は、五逆や十惡のような局所的な罪をいうのではなく、人間の存在そのものの罪、すなわち生きることそのものが罪をつくっていることをいう。だから、ここに仏教が懺悔を説く最大の理由がある。従つて、淨門の禪定は、心を働かせて理解しようとする念相観は超え、ことばによつて理解しようとする言語の法も超え、生きることそのものが限りなくつくる罪も除いていることをいい、これが清浄心のみの境地となつてゐる意となる。

(42) まさに善く垢心を却くべし＝「垢」は、煩惱垢の略であり、根本煩惱から出て、その相が特に汚れているものをいう。従つて、「垢心」は、煩惱に塗

れた心の意と取る。「却」は、絶対否定の語であり、

徹底して斥ること、除くことをいう。

従つて一句は、煩惱に塗れた垢心を徹底して除きなさいの意となる。

(43) 真の寂虚を体すれば＝真の安らぎを得、礙げとなるものが何もないことを体得すればの意と取る。

(44) 依倚＝寄り掛かるの意である。ここでは、捉われ妨げるの意と取る。

(45) その時、淨禪漸く深寂に、豁然明朗にして、眞の無漏を発こし、三乗の道を証す＝「その時」は、そのように体得すればの意に用いる。

「淨禪」は、六妙法門の第六、心そのものにも、一切こだわりをもたない修行法である淨門の禪定、すなわち心的統一をいう。

「深寂」は、到達した一つの深い悟りの境界をいう。

「豁然明朗」は、到達した深い悟りの境界は、何処までも行き渡り、行き渡らないところがない大空のようであつて、しかも他の一切の障害とならない虚空のように、からりとして明るく、融通無碍、礙げ滅し、眞の安らぎとしての悟りの境地を起こす。そ

るもののが一切ない悟りの境界をいう。

「眞の無漏」は、無余依涅槃と同義。煩惱も肉体も完全に滅し尽くしたニルヴァーナをいう。無漏の「漏」は、眼・耳・鼻・口・大小便道の六瘡門（九瘡門）から漏れ出るものゝ意であり、煩惱の異名である。漏れ出る煩惱具足の迷いの心にある状態が「有漏」であり、漏れ出る煩惱を離れ断滅した安らぎの状態が「無漏」である。

「証す」は、悟ること、無上の真理を身をもつて実現することの意である。ここでは、実際にそれぞれ人の心の働きや素質・能力に応じて、声聞乗・縁覚乗・菩薩乗のいずれかの修行実践の道を完成することをいう。

従つて一句は、垢心を除き、身も心も障りとなる煩惱を一切断滅すれば、心そのものにもこだわりをもたないという淨門の禪定によつて、心は静まり返り、からりとして明るく、障害となる迷いは一切消滅し、眞の安らぎとしての悟りの境地を起こす。そ

天台『六妙法門』の研究(三) (大野)

して、その人の心の働きや素質・能力に応じて、声聞乗・縁覚乗・菩薩乗のいずれかの修行実践の道を完成するの意となる。

(46) 涅槃＝迷いの火を吹き消した状態であり、苦なく、欲なく、一切の煩惱なく、身心が生死を離れた寂靜にあるニルヴァーナをいう。

(47) その中間において＝中間は「ちゅうげん」と訓み、悟りに至っていない中間の意である。従つて、修行者が求道の念を起こし、悟りに至ろうと修行実践している最中においての意となる。内外中間とも熟す。

(48) 内外の障＝人の過去のカルマ、すなわち業因によって束縛されるのが「内障」、六識が六根を通して六境を分別することによって、つくり続ける現在のカルマ、すなわち現在の業因によって束縛されるのが「外障」である。

つまり、内障は潜在的な業による内の煩惱をいい、外障は六根を通した業による外の煩惱をいう。

(49) もし差ゆることを得れば、すなわち薬となすな

り＝「差」は、いゆると訓む。癒える、癒す、直る、直す、病気が回復するの意である。

「薬」は果を生ずるものをいう。坐禅の目的は、悟ることにあるのではない。坐禅を行って悟つたと驕る心も、坐禅は無意味ではないかと葛藤する心も、坐禅によつて身心の病に墮ちるのも、全て「直る病」であると智顗は説く。

従つて一句は、一つひとつの修行法が内外の障りを癒すものであるから、一つひとつの修行法は修行の果報をもたらす薬だという意となる。

(50) 禅の障及び禅中の魔事・病患を治するに、功をもつて六門を用いて悉く差ゆることを得るなり＝「禅の障」は、坐禅によつて起こる、いわゆる禅病をいう。本当は悟つていらないのに悟つたと広言して憚らぬ驕り昂ぶる障りや、逆に自分は悟れない、駄目だと卑下する仏道修行の障りが禅病である。禅病は、仏教が目指す坐禅とは、似て非なるものである。禅病は、徹底して悟りを貪り求めて、悟りに執着する特殊な境界を作り上げてしまうものである。坐禅

による仏道修行は、超能力者を作るためのものではない。禅病は、煩惱に塗れ続ける己心を明かし、煩惱を対治し続け、安らぎの涅槃を求め続ける生き方を求める仏教の方向の対極にあるものである。

「禪中の魔事・病患」は、坐禪の中で生起する心の葛藤をいう。潜在的な過去の業因に束縛され、仏道修行の妨げとなる葛藤や身心の病をいう。

仏道修行の妨げとなるものを、比喩では「魔」、内容では「障」という。要するに仏道修行の妨げとなるものを、魔事ともい、病患ともいう。

「治」は、直すの意である。「差」と同義。ここでは、相対して断じ滅してしまうの「対治」の前段階の直す程の意と取る。

「功をもつて」は、直ることを前提にして程の意。凡夫に生起して止まない自我は、諸々の煩惱の元となる根本煩惱である。智顕は、この自我を病氣だと捉える。自我は病氣であるから、必ず直るという前提に立つのである。直るという治療の可能性を前提として、数息・隨息・止・觀・還・淨の六妙門を一

つづつ用いていきなさい、と文意は続く。

従つて一句は、禪定が起こす仏道修行の障りとなる悟つたという驕り昂ぶる心や、禪定の中で起こる坐禪など無意味ではないかと思う心中の葛藤や、禪定が引き起こす身心の諸々の病を直そうとする時は、仏道修行の障りとなるものは全て病だから、必ず直ることを前提として、数息・隨息・止・觀・還・淨といふ六妙門の修行法を、自分の心の働きや素質・能力に応じて、一つずつ用いていけば、禪定の障りとなるものは全て癒すことができるものであるの意となる。

(51) まさに善く思推して意を取るべし=「思推」の「思」は、心を動かす働きをいい、「推」は、十分に検討・考察することをいう。従つて、「思推」は、思いはかるの意と取る。

「意を取るべし」は、その時その場の、その人の心の状態、素質・能力などの機根に応じて、数息・隨息・止・觀・還・淨の六妙門の一つ、あるいは幾つかを適宜に修行実践しきることが、根本煩惱である

天台『六妙法門』の研究(三) (大野)

自我という病を直す最善の方法だという、第三章の主旨を的確に掴みなさいの意となる。

従つて一句は、隨便宜六妙門の主旨によくよく思ひを巡らし、検討し、真意を理解しなければならぬの意となる。

(52) 妄りに行ずること勿かれ॥自分の心の状態や素質・能力などの機根に合わない修行のための修行では、發菩提心を成就することは望むべくもない。これが「妄りに行すること」である。

隨便宜六妙門が意図する真意を十分に汲み取つて、その時その場の自分の心の状態や機根に合致した修行法を、數息・隨息・止・觀・還・淨の六妙門の中から適宜に選び出して、徹底して修行実践しなさいと説くのである。

(現代語訳)

次に、第三の心の働きや素質能力という機根に応じて、適宜に六妙門を用いていく「隨便宜六妙門」を明らかにする。

一から十まで呼吸を数えて乱れた心を調える「數息」を

もし心の働きに応じて、巧みな手段方法を用いなければ、修行によって心を統一したとしても、結局は徒労に終わってしまう。だから、初めて坐禅を行じる時は、先ず心の散動を止め、心をととのえる方法を知らなければならないのである。

修行者が、深く統一された禪定や一切のものの真のすがたを觀察する智慧と、一切のものありのままの実相や煩惱を超脱した安らぎという涅槃の境地を得たいと願うならば、初めに、安らぎと動すことのない心を得る修行をしない。その時は、修行者の心の働きや素質能陸に叶つた、巧みな手段方法を用いなければならない。

どうして、巧みな手段方法を用いなければならないのか。それは、六妙門の修行法を熟知し、体得し、自らの心そのものを克服し制御しなければならないからである。従つて修行者は、心の働きや機根に応じて、利があるならば、常に數息・隨息・止・觀・還・淨の六種類の修行法を適宜に用いなければならない。

理由は、どこにあるのか。

修行し、次に呼吸に従つて自我的な心を静める「隨息」を修行し、（心の働きを停止して心を一つの対象に集中する「止」を修行し、）また対象を客觀化し内にある心を觀察する「観」や、自分の心に執着せず心を解放する「還」（や、心そのものにも一切こだわりをもたない「淨」）などの修行法を実践していき、一つひとつの修行法を数日間にわたつて実践し終えるのである。

更に続いて、「數息」「隨息」から「還」「淨」までの修行法を、心を一点に止めて修行し、それぞれ数日間にわたつて修行を継続していくのである。

このように何度も繰り返して修行実践をすれば、修行者は、素質や能力に応じて、心が自在に働かされることを自覚するものである。

もし心が「數息」を修行して利があるならば、數息門の修行法で心を集中しなさい。従つて、「隨息」も「止」も「観」も「還」も「淨」も同じである。その場その場の心の巧みな働きに従つて六妙門を用いるのであって、必ずしも數息・隨息・止・観・還・淨の順序に従つて実践するものではない。

このようにして心を集中して、心が不動のものとなる時は、身体は安らかとなり、呼吸は調い、心は散動を止め静かになる。その結果、智慧の眼が開き、全てが安穩堅固であると自覺するならば、いつでもこの隨便宜六妙門を修行実践しなさい。必ずや深遠な利益があるのである。

それでも、もし妨げとなる煩惱が生じて心が散動し、対象が私を支配して迷路に墮ちた時は、落ち込んだ情況に応じて心を巧みに働かせて、別の六妙門を修行実践しなければならない。別の六妙門を実践して心を安んじ、善をなす心を起こし、長く十善業道を最善の規範としていかなければならない。

以上、仏道の修行に初めて入る修行者が、心の働きに応じて六妙門を適宜に使つて、心の統一を計る隨便宜六妙門を略述した。これが、素質や能力に応じて、六妙門という巧みな修行実践の手段や方法を知る要諦である。

また、次に、修行者の心が自我を捨て安定していれば、必ず悟りがあるのである。どうすれば、悟りが得られるのか。

いわゆる仏道の修行の中に身を置き続け、欲界における

粗い煩惱や細かい煩惱を観察し、欲界から色界に到る準備段階の修行や、覓・観・喜・樂・一心からなる、欲界の迷いを超える初禪などの、種々の禪定を修行実践するのである。これらの種々の禪定を実践し終わっても、もし心がそこに止まつて先に進まない時は、禪定の深い浅いの程度によつて、数息・隨息・止・觀・還・淨の六種類の修行法を実践して、本来、菩薩・仏である己心の本性を切り開いていかなければならぬ。

禪定の境地が浅くて増進していないのに、数息・隨息・止・觀・還・淨の六種類の修行法を実践し、進めるということは、どういうことか。

修行者は初め、本来、仏・菩薩であるという人に相応しい仏道修行の中に身を置き続け、粗い心の働きがつくる煩惱を觀察し、そして細かい心の働きがつくる煩惱を觀察する修行法を実践するのである。そして、月日を経ても、禪定の境地が深化し発展しない時は、数息門の修行法を実践して、散動する心を集中させるのである。

数息門の修行で禪定の境地に深化発展がなければ、数息門を捨てて隨息門の修行法を実践し、自我的な心を静める

のである。

隨息門の修行で、禪定の境地に深化発展がなければ、止門の修行法を実践して、一心に思いを凝らし、心意識の働きを停止して、心を一つの対象へ集中するのである。

止門の修行で、禪定の境地に深化発展がなければ、禪定の中での五陰・十二處・十八界で構成される心の働きである、潜在的な煩惱や今もつくり続いている煩惱を觀察するのである。

觀門の修行法で、禪定の境地に深化発展がなければ、還門の修行法で、更に心の奥底を尋ね直し、自分の心に執着せず、心を解放していくのである。

還門の修行法で、禪定の境地に深化発展がなければ、心そのものにも一切こだわりをもたない淨門の修行法を実践して、陰入界の対境にも動搖することのない境地を体得していくのである。

この数息・隨息・止・觀・還・淨の六種類の修行法を用いる時、もしそ中の一つの修行法だけで、浅い禪定から深い禪定へと修行が増進するならば、その修行法で徹底して修行するがよい。

既に段階を踏んで、徐々に修行が増進し、深い禅定の境地に入っているならば、それは数息門の境地は超えているといえる。数息門の禅定の境地が達成されれば、それから進んで隨息門の禅定を起こすことになる。

この隨息門の禅定の中で、もし禅定の境地が増進しなければ、隨息・止・観・還・淨の五種類の修行法のいずれかを実践しなさい。浅い禅定から深い禅定へと禅定が増進して、徐々に境地が深くなれば、隨息門の境地に既に至り得ていることになる。

もし止門の禅定を起こしても、禅定の境地が増進しなければ、止、及び觀・還・淨の四種類の修行法のいずれかをよく実践しなさい。

止門の禅定が増進して徐々に深くなれば、深く思いを凝らし、自己のこころの本性を対象として觀察する觀門の心を掘り起こすことになる。心の働きを停止する止門という修行法を実修すれば、逆に様々の潜在的意識が生起していく。生起した心は、仮につくられたものであって、心の働きにも実体があるのではないと知れば、それで止門の境地を達成することになる。

もし觀門による禅定が進まなければ、更に巧みな手段方法を使つて、觀及び還と淨の三種類の修行法のいずれかを実践しなさい。觀門の修行法によつて、禅定の境地が進み、増進し終わつて、觀門の境地が達成されれば、いよいよ深い禅定に入り、眞実の智慧に照らされた悟りを引き出し、ただ自分の心のありのままの清浄なすがたを悟ることになる。この段階的な觀門の悟りは偽りであり、眞実ではなく、また誤つて分別されたものであつて、ただ夢の中で思ひ出すように、実体はないと知るのである。觀門も実体がないと知つた後は、この觀門にも執着しないのである。

その時は、自分の心にも執着せず、心を解放する「還門」という修行法を使って、心のみなもとを照らし出すのである。還門の修行法を長く実践しても、還門の禅定が増進しなければ、また更に、心の奥底を徹底して觀察し、そして、心そのものにも一切こだわりを持たない「淨門」が、まさに安らぎそのものであると体得しなければならない。

還門の段階にある禅定は、既に進み増進し終わり、もし還門の境地が達成されれば、そこに淨門の禅定が起こる。この淨門の禅定は、心を働かせて理解しようとする念相観

は既に除き、ことばによつて理解しようとする言語の法も消え失せ、生きることそのものが限りなくつくる罪も除いて、捉われ執着することのない清淨心のみとなる。これを、淨門の禪定と呼んでいる。

淨門の境地が進まなければ、煩惱に塗れた垢心を徹底して除きなさい。垢心を除いて、眞の安らぎを得、礙げとなるものは何もないことを体得すれば、心は大空のように満ち渡り、捉われ礙げとなるものは何もない。そのように体得すれば、淨門の禪定は漸く深い悟りの境地に達し、からりとして明るく、礙げるものは何もない。このようにして眞の安らぎの境地を起こし、人それぞれの心の働きや機根に応じて、声聞乗・縁覚乗・菩薩乗のいづれかの修行実践の道を完成することになる。

以上、この隨便宜六妙門は、心の働きや機根に応じて、數息・隨息・止・觀・還・淨の六種類の修行法を適宜に実践していくば、諸々の禪定の結果得られる善いはたらきや、一切のものがあるがままにあるすがたを、あるがままに觀察する智慧のはたらきを增長し、完全な安らぎである涅槃の境地に入ることができることを簡潔に説いている。

また次に、修行者が悟りに至る中間において、もし潜在的な内なる障りとしての煩惱が起き、あるいは眼・耳・鼻・舌・身・意の六根を通す障りとしての煩惱が起きる時、その障りを斥け断じようと思うならば、數息・隨息・止・觀・還・淨の六種類の修行法の中から、心の状態に応じて一つを取り上げ、一つひとつを試み、過去の業因や現在の業因による内外の障りとなる煩惱を断じ除きなさい。

もし内外の障りを癒し回復すれば、一つひとつの修行が果報をもたらす薬となる。禪定がもたらす驕りという障りや、禪定の中で起ころる葛藤という障りや病を直そうとする時は、必ず直ると見定めて、數息・隨息・止・觀・還・淨という六種類の修行法を適宜に用いていけば、禪定の障りとなるものは全て癒すことができるものである。

以上説いてきたその真意は、容易には理解しがたいものである。修行者が、もしこの隨便宜六妙門という修行法を用いる時には、よくよく思い巡らし、検討し、意趣を理解しなければならない。

人それぞれの心の状態や、素質・能力などの機根に応じて、適宜に六妙門を修行実践しなければならない。